

在台2世の描く「台湾」と「台湾人」

新垣宏一「城門」を中心に

和泉司

✉ sktmzi0918@gmail.com

Koichi Niigaki, born in Japanese occupied Taiwan, is a Taiwanese-born Japanese or “Ni-sei”. He graduated from high school under the old education system and former imperial university. That is, he was a member of the elite with a high education in Taiwan.

He participated in the Taiwan new literature movement in the 1930's and, after Mitsuru Nishikawa took initiative of the literature movement in the 1940's, he wrote texts based on his life experiences in southern Taiwan. As a result, almost of his texts are connected with a girl's high school under the old system in Tainan city, and he described Taiwanese context, history and customs.

Niigaki added the subject of the imperialization policy to his texts, which revealed its deception regardless of his real intention.

Since his text “Teimei” was one of the works being considered for Bungei-Suisen, the Bungei literary prize in 1942, it seems that he was conscious of Chuo-Bundan, the literary world of Tokyo. His works increasingly came to describe Taiwan.

Niigaki often described male teachers in his texts and depicted them in a positive light. However, he did not reflect on the power the Japanese living in Taiwan had. As a result, his texts reveal Japanese irresponsibility and arrogance, which were significant deficiencies of Japanese writers living when Japan ruled Taiwan.

Keywords Literature written in Japanese(日本語文学), “*Bungei Taiwan*”(『文芸台湾』), the literary world of Tokyo(中央文壇), the literary world of Taiwan(台湾文壇), Literary prize(文学懸賞)

1. はじめに

日本統治期台湾における近代文学運動は、1920年代初めに起こった〈台湾新文学運動〉から始まったと言われている。この文学運動は、1920年前後に、台湾島内にも当時世界的な動きとなっていた民族自決主義の影響が伝わったことで起こった台湾議会設置誓願運動に代表される日本帝国支配下での権利獲得闘争の一環でもあった。それは、この権利獲得闘争が〈中国人〉としての民族意識に基づいており、その中で〈台湾新文学運動〉は北京語による白話文運動の推進を目的として動き出したことからわかる。また、〈台湾新文学運動〉に関する初期論文・評論の初出が、権利獲得闘争の中心団体である新民会・台湾青年会の機関誌である『台湾青年』に掲載されていたことも、それを証明している¹。

しかし、北京語白話文を用いよ、という初期の主張は、台湾語文による表現運動との間に論争を引き起こした。それが1930年代における郷土文学論争である。

一方、台湾総督府の有形無形の圧力の下、台湾島内では清朝統治期から存在していた、書き言葉としての漢文を教育する書房と呼ばれる教育機関が数も生徒も減らしていた。そして、総督府が設置していた国語教習所を出発点とする、日本語を教授する初等教育機関が広がり始めていた。これは、日本人生徒の入学する小学校と区別され、公学校と呼ばれていた。日本の植民地統治開始以後に生まれた台湾人にとっての教育機会は、こうして日本型教育が多数派となっていたのであった。

このような状況を背景として、1930年代に入ると、台湾では日本語によって文学活動を行う者が増え始めた。このとき、日本語文学運動の中心を担ったのは、1910年前後に生まれ、学校教育によって日本語を身につけた青年たちであり、かつ、その多くが東京留学生であった。

彼らは台湾の教育制度史的に見るとちょうど転換期の世代に当たる。台湾では、1919年、21年の台湾教育令(一次、二次)によって、台湾島内の中等教育機関が台湾人生徒の入学を認めるようになった。それまでは、台湾島内にあった中学校・高等女学校等は、日本人(内地人)学校であり、台湾人の入学を拒んでいたのである。つまり、21年の第二次台湾教育令によっていわゆる「内台共学」が認められるまで、台湾人が公学校卒業後に進学を希望する場合は、日本内地の学校に「留学」しなければならなかったのである。それが台湾人東京留学生の増加の一因なのであった。そして、台湾人の自主的な活動に対する制約が非常に多い台湾島内に比べ、相対的に「自由」な場所であったこともあり、権利獲得闘争においても〈台湾新文学運動〉においても東京がその中心地になったのだった。さらに、1931年に台湾島内における権利獲得闘争の運動主体であった台湾文化協会が総督府当局によって解散に追い込まれると、生き残ったのは文学運動だけになってしまった。

¹ 権利獲得闘争及びその時期の〈台湾新文学運動〉については、若林正丈『台湾抗日運動史研究 増補版』(研文出版、2001.6)と河原功『台湾新文学運動の展開』(研文出版、1998.2)を参照している。

このようにして、1930年代になり、〈台湾新文学運動〉において、日本語による文学運動が徐々に中心的になっていった。この時、運動主体は台湾人青年たちで、台湾在住の日本人(当時の呼称でいう「内地人」。以後、在台日本人と表記する)はまだほとんどこの運動に関わっていなかった。

だが、例外的に30年代の〈台湾新文学運動〉に関わっていた在台日本人の一人が、新垣宏一であった。

新垣宏一を、単独に扱った研究は非常に少ない。台湾では修士論文として陳欣璋『日本統治時期在台日籍作家之研究—以新垣宏一為中心—』(輔仁大学日本語文学系, 2004年)、論文として林慧君「新垣宏一小説中の台湾人形象」(『台湾文学学報』16号, 2010年6月)が発表されているが、日本の公刊論文では論者によるもののみであり、それも台湾文学研究の進展した現在、見直す必要に迫られたものになっている。しかし、新垣の文学活動に注目し、日本統治期の日本語文学を見直すために重要視する研究も各所で動き始めている。本稿は、そうした動向に棹さすものでもある。

2. 〈在台2世〉・新垣宏一

新垣宏一(1913~2002)は、日本統治期の台湾・高雄で生まれ、高雄第一小学校、高雄中学、台北高校を経て、台北帝大文政学部に入學した。37年に卒業すると、台南第二高等女学校の教員となり、41年に台北第一高等女学校に転任した。日本帝国がアジア太平洋戦争に敗戦し、台湾が中華民国に〈光復〉すると、しばらくは台北第一女子中学(台北第一高等女学校から名称が変更された)に留用されたが、47年に日本に引き揚げ、本籍地であった徳島県に移住し、その地の県立高校教員となった。引揚後は一切自分自身の文学活動はせず、教員としての仕事と、日本近代文学の研究活動を行った。

新垣は生まれてから敗戦後の日本に引き揚げられるまで、一貫して台湾に暮らした典型的な〈在台2世〉であった。そして、典型的であるが、少数派とも言えた。なぜなら、彼は高校・大学進学段階においても台湾島内の学校に進み、就職でも台湾から日本内地などの他地域に移動しなかったからである。もちろん、小学校・中学校時代の修学旅行や家族旅行等で日本内地へ渡った経験はあっただろうが、日本敗戦に至るまで、日本内地の定住経験が一切ない人物は、少なくとも、後述する1940年代に登場する在台日本人作家の中では、新垣以外にはいなかった。40年代の台湾文壇を代表する日本人作家・西川満でも、出生地は会津若松で、台北一中卒業後は早稲田高等学院・早稲田大学に進学し、東京暮らしを経験しており、厳密には台湾の「2世」とは言えない存在である。また、先に述べたように、40年代についていうならば、台湾人作家たちにしても、そのほとんどは東京留学や東京での就業を経験していた。つまり、新垣は経験的に日本内地をほとんど知らない日本人だったのであり、しかもそれはなんらかの強制の結果ではなく、自身の選択によるものであった。

しかし一方で——あるいは、だからこそ、新垣ははっきりと〈日本人〉であり、〈日本人作家〉であった。それは、彼が差別意識を露わにした作家であるとか、支配者意識の強いテキストを多数発表していたという意味ではない。むしろ、彼のテキストから受ける第一印象は、その穏やかな性質であり、台湾人・台湾人社会を冷静に眺める様子である。

しかし、差別主義者ではなく、支配者意識の強い人物でもないとしても、その作家としての姿勢や、テキストに描かれているものは、支配者の〈日本人〉そのものである。植民地2世であり、その手によるテキストであるからこそ、そのような問題・限界が露わになっているといえよう。

このような新垣宏一の文学活動とテキストを通じて、在台2世による植民地台湾における日本語の文学活動への分析を行い、植民地の日本語文学活動の意義と禍根を考えてみることにする。

3. 新垣宏一の文学活動と『文芸台湾』

先述の通り、新垣宏一は日本人としては例外的に、1930年代から台湾島内での文学運動にその名前が見られる人物であった。

30年代、日本語の活動が目立ち始めた〈台湾新文学運動〉の中で、台湾島内でも『台湾文芸』(1932~35)や『台湾新文学』(1935~37)といった文芸同人誌が発行されるようになっていた。このうち、新垣は『台湾文芸』に小説「決別」(1935年6月に(上)、7月に(中)、未完)と詩「切支丹詩集」(同年8月)を寄稿している。また『台湾新文学』創刊号(35年12月)に「反省と志向」という投書も掲載されている²。いずれも新垣が台北帝大二年生の頃である。また同時期に新垣は台北帝大文政学部の機関誌として『台大文学』創刊に関わったという³。

『台湾文芸』『台湾新文学』の運営・執筆の中心は台湾人青年たちであり、新垣は関わったとは言っても寄稿した以外にこれらの同人団体の中で積極的な活動が見られたわけではない。もちろん、在台日本人の参加者がそもそも大変少ないことも影響しているであろうが、新垣は自分を前面に押し出していくのが苦手な人物であったと、その台湾での文学活動の動向から推測できる。小説や詩、随筆などの文学テキストの発表が多い一方で、30年代においてはもちろん、40年代になっても、同人誌運営に携わったことを伺わせるテキストはほとんど残っていないからである。ただし、自分の属するコミュニティの内部においては、それはやや事情を異にすることも『台大文学』の活動から想像できる。

² 新垣の著作については、新垣の自伝である新垣宏一著・張良沢編訳『華麗島歲月』(台湾：前衛出版社、2002)の「新垣宏一先生年譜初稿」を参照した。以降、本稿では同書を『自伝』と略称する。

³ 新垣前掲『華麗島歲月』を参照。

このような、組織の中で自分を強くアピールしようとしないうという新垣の姿勢は、先に名前を挙げた西川満との関係を考えると、より鮮明になる。

新垣は『自伝』の中で、西川満についてこのような記述から始めている。

そのような時(新垣が台大生時代—引用者注)、西川満兄が東京から帰北したので。西川は早稲田大学の仏文科を卒業して、台北の『台湾日日新報』社に籍を置き、台湾文壇に独走の活動を始めたのです。「媽祖祭」の限定本詩一卷を独力で出版し、初めてその中で台湾風土の情調を発表しました。この独特の詩には、全く私の魂が奪われるような衝撃を受けました。(略)

西川はまた、「愛書会」を組織していました。山下樵図書館長をはじめとし、矢野、島田、滝田、その他神田喜一郎教授など台大読書人たちのグループを会員として、愛書趣味と学問との融合の新世界を組織したのです。

(略)

西川は矢野、島田の両先生に熱心に近づき、自分の情調を外地文学確立へと進めたありさまは、実に美事というべきで、彼の作詩と、その出版に対する独自の活動は、我が台大派の文学陣を追い越していきました。西川はその出版物の中で矢野、島田両先生についての親近の由来についての自己顕示の劇しさは、その両先生を独占しているようでした。私のように島田先生と、食事は宿泊を共にして、深く先生から愛されていると信じていた者には、この西川の宣伝に嫉妬をも抱かせたのです。[傍線は引用者による]

西川は1909年生まれで、満2歳の時、父が台北で親族の経営していた炭鉱会社を引き継ぐことになったために台湾に渡ってきた。早稲田大学での指導教授は吉江喬松である。吉江は大学卒業後東京に留まろうとしていた西川に「南方は / 光の源 / 我々に秩序と / 歎喜と / 華麗とを / 与へる」という献辞を送り、帰台を促した⁴。そしてその際に、台大教員であった矢野峰人、島田謹二への紹介状を西川に与えていたのだった。

西川は父親が台湾の炭鉱経営者だったこともあり、裕福な家庭で育ち、資金面で恵まれた環境にあった。それが、愛書会の運営や機関誌『愛書』や個人詩集『媽祖祭』、個人誌『媽祖』の発行も可能にさせていた。もちろん、『台湾日日新報』の記者職や、当時台湾で発行されていた『台湾婦人界』の文芸欄の担当もしていた西川の、常識外れとも思える旺盛な出版意欲と勤勉さも重要な要因である。新垣は西川の資金面での優位性も当然知っていたはずだが、『自伝』においてそれに触れていないのは、西川のこのようなバイタリティにこそ圧倒されたからかもしれない。新垣は台湾島内での正統な学歴ルートでその頂点の台北帝大まで進んでいたが、そのような学歴エリート線の細さを、西川によって暴かれたという気持ちもあったのではないだろうか⁵。

新垣の人間的な善良さは、ここで覚えた西川への嫉妬を憎悪に展開させず、自ら「西

4 一方、同じく早稲田大学で西川を指導していた西条八十は、東京を離れることの不利益を指摘し、吉江の勧めを現実的ではない、と批判したという。西川満『わが越えし幾山河』(人間の星社、1983.6)を参照。

5 一方、西川満は、台北一中卒業後、台北高校の入試に失敗している。

川派」⁶と名乗るくらいに西川の活動に協力するようになった点にも垣間見られる。1937年に台北帝大を卒業した新垣は、台湾州立第二高等女学校に教員として赴任した。台南は新垣の出身地・高雄に隣接する都市であり、また台南で最も長い「歴史」を持つ街でもあった。当時の台南には、濱田隼雄(台南二高女教員、1909~1973)、国分直一(台南一高女教員、1908~2005)、前嶋信次(台南一中教員、1903~1983)といった、文学活動・研究活動を行っていた人々がおり、新垣は彼らとの交流と、そして自身が赴任した台南二高女の「特殊な」(『自伝』)環境から、作家として新たなテーマを獲得することになった。それは、台湾の「歴史」がスタートした街としての台南への深い関心と、そして台湾人の文化・風習についての調査・研究とを基にした「本当の台湾を描く」というテーマであった。

新垣は台南において、その歴史や文化、史跡に関する調査を進めるようになった。同時に、1920年に台湾を訪れた佐藤春夫がその経験を基にした、現在「台湾もの」と呼ばれるテキスト群についての調査も行った。特に熱心であったのは台南を舞台にした怪異小説の体裁を取ったテキストである「女誠扇綺譚」(1925年)に関する調査で、その舞台となった地域についてや、また佐藤を台南で案内した人物の特定などを進めた。その結果は、当時『台南新報』という新聞紙面に「佐藤春夫のこと」(1938年)「佛頭港記」(1939年)「女誠扇綺譚と台南の街」(1940年)という随筆として発表されている。このとき、新垣は「女誠扇綺譚」をはじめとする佐藤春夫のテキスト群を非常に高く評価していた。

新垣が台南二高女を「特殊」と呼んだのは、この学校の生徒の台湾人比率が高かったからである。先に触れた台湾教育令によって、「内台共学」が実施されるのに伴い、予想される進学希望者の増加に対応するため、台湾各地の都市で中等以上の学校が新設されていた。そのとき、ほとんどの都市で、台湾教育令以前からあった中学校・高等女学校を「第一中学校」「第一高等女学校」とし、新設校を「第二中学校」「第二高等女学校」と命名していた。そして、「第一」は従来同様、ほぼ日本人生徒しか受け入れず、逆に「第二」では台湾人生徒が過半数となっていたのである⁷。このような事情から、新垣の赴任した台南第二高女は台湾人生徒中心校であり、かつ高等女学校に進学できる女子生徒は多くの場合富裕層出身で、台湾の旧習・伝統(特に婚姻や家族制度に関するもの)を守っている家庭であることが多いということから、新垣は同校を「特殊」と呼んだのである。さらに、台湾で生まれ育ちながら、学齢に達して以降はほとんど台湾人社会と接点が無くなっていた新垣にとって、教師と生徒という関係性の中とはいえ、台湾人と直接交流するようになったことに大きな影響を受けたのだった。そしてそれを、自身のテキストに反映させたのである。

6 新垣前掲『華麗島歲月』を参照。

7 「第一」に受け入れる台湾人生徒は一学年5~10名程度であったのに対し、「第二」では学校によって差はあるが、数十名の日本人生徒が受け入れられていた。つまり、人口比率で言えば少数派であった日本人児童の方が、中学校・高等女学校入学において圧倒的に有利であった。

4. 1940年代の新垣宏一とそのテキスト

1937年4月に、総督府当局から台湾島内の新聞各紙の「漢文欄」廃止が要請一実質的に強制されたことにより、当時唯一残っていた文芸同人誌『台湾新文学』は、日文、中文双方のテキストを掲載していたために廃刊に追い込まれた⁸。その後、しばらく台湾島内で小説等を掲載する文芸同人誌は出ていなかったが、1939年末に西川満が中心となって台湾詩人協会を結成し、その機関誌『華麗島』を創刊した。そして翌40年、この『華麗島』を台湾文芸家協会の機関誌『文芸台湾』に衣替えをした。『台湾新文学』までは台湾人が中心であった台湾の文学運動だったが、40年代に入ると在台日本人の比率が高くなっており、日中戦争から続く戦時下の状況と〈皇民化運動〉の影響もあって、『文芸台湾』は台湾人と在台日本人が共に参加する最初の大規模な文芸同人誌となったが、その運営主体は西川満をはじめとする在台日本人に移っていた。故に、この約一年後の1941年6月、『文芸台湾』同人の中で、主に〈台湾新文学運動〉の時期から文学活動を行っていた人々が同誌同人を辞め、新たに『台湾文学』を創刊し、『文芸台湾』と対立・競合するようになっていた。

この時、新垣は『台湾文学』に参加せず、そのまま『文芸台湾』に残っていた。『台湾文学』に移った人々は1930年代の〈台湾新文学運動〉に参加していた人々が中心であり、その意味では、当時の運動にも参加していた数少ない在台日本人の一人であった新垣も移籍したとしてもおかしくなかったかもしれない。しかし、西川との親交や、同誌で西川に肩入れしていた矢野峰人、島田謹二との関係も影響してのことだろうが、新垣は『文芸台湾』に留まったのであった。

この残留には、同時期、新垣が個人的なめめ事を抱えていたことも関わっていたであろう。新垣は1941年6月17日と19日付の『台湾日日新報』に、「第二世の文学」という記事を発表していたが、この記事が職場の同僚教員の不評を買い、台南に居づらくなったと『自伝』で述べているからだ⁹。その結果、先に台北へ転任していた濱田隼雄や国分直一の斡旋で、台北一高女へ転任したというのである。ただ、『自伝』の中で台北への転任は1941年4月と述べられており、「第二世の文学」の発表時期より以前に台南を離れていたことになるので、新垣の記憶には大きな矛盾があるのだが、とにかく〈2世〉の意識を巡って、在台日本人の同僚との間で摩擦を起こしたことは間違いなく、その結果自身が愛好した「台南」を離れることになったのも事実であった。そして、このような個人的な問題を抱えている時、同人誌運営の摩擦や分裂騒動に関わろうという意識も低かったであろう。さらに、『文芸台湾』『台湾文学』双方が台北を拠点として活動していた時、台南にいる新垣がその運営問題に積極的に関わるのは距離的にも困難であったことも考慮

⁸ 1937年の新聞漢文欄廃止と『台湾新文学』廃刊については、河原功『翻弄された台湾文学』(研文出版、2009.6)所収の「一九三七年の台湾文化・台湾新文学状況—新聞漢文欄廃止と中文創作禁止をめぐる諸問題」を参照した。

⁹ 「第二世の文学」の初出については、謝恵貞氏にご教示いただいた。また、「第二世の文学」発表と台北一高女転任時期の前後関係に関する矛盾については、大東和重氏にご意見をいただいた。

しなければならない。

いずれにしても、新垣は『文芸台湾』に残り、また台北に移動して教員生活を送りながら小説を発表するようになった。彼の小説テキストの多くは台南を舞台にし、さらに台湾人児童・生徒が登場するものが多いのだが、それらは全て台南を離れてから発表されたことになる。

ここで『文芸台湾』に掲載された新垣の主要小説テキストについてまとめておこう。発表順にすると、次のようになる。

「城門」『文芸台湾』第3巻第4号(1942年1月)

「盛り場にて」『文芸台湾』第4巻第1号(1942年4月)

「訂盟」『文芸台湾』第5巻第3号(1942年12月)

「山の火」『文芸台湾』第5巻第6号(1943年4月)

「砂塵」『文芸台湾』終刊号(1944年1月)

このうち、台湾の山地を舞台に山地原住民を雇用して藤や樟腦の伐採をして暮らす日本人家族を描いた「山の火」を除くと、他のテキストは全て台南を舞台にしている。また、台南市内にある「盛り場」¹⁰にたむろする台湾人浮浪少年を主人公とした「盛り場にて」以外は、日本人教師と台湾人生徒・学生との交流を描いたものとなっており、その交流の中で、非常に多く台湾の習慣や文化などが説明されていた。

つまり、新垣の主要小説テキストは、彼が台北へ転居してから発表されているが、その舞台はほぼ全て台南であり、また新垣が「特殊」と認識していた台湾人生徒主体の高等女学校と関連した内容になっていたのである。新垣は、台北へ移った後も、自身の文学活動の基盤、ひいては作家としてのアイデンティティを「台南」に求めていたことになる。それが、台北に偏在していた台湾在住作家達に対して、自分の存在意義を示せる点だと考えていたのであろう。

文学運動の運営の中で自分をアピールすることは、性格的にも業務上も困難であると考えた新垣は、他の作家が知らない「本当の台湾」を、台湾の古都と言われた台南を語ることによって描き、それによって台湾文壇における自己の立場を示そうと考えたのではないだろうか。そうであるとき、新垣の台南を描いたテキストには、新垣が自己の優位性と考えている事象が潜んでいるはずである。

ここでは、前述の台南を舞台にした小説テキストのうち、特に台湾人生徒・学生との関わりを描いた「城門」を中心に、その内容を分析することで、新垣のテキストの意義と限界を考えてみたい。

5. 描かれる〈皇民化運動〉の欺瞞と日本人教師の沈黙

「城門」は、台南の高等女学校を卒業した女子生徒・劉金葉が、自分の担任であった男

¹⁰ 現在でもこの地区は台南で「沙卡里巴(サカリバ)」と呼ばれている。

性日本人教員・「先生」に宛てた手紙、という体裁を取ったテキストである。金葉は台南市内の資産家の娘であり、〈皇民化運動〉の影響を強く受けていて、台湾の家族制度に縛られている自分の家族、特に父親への不満を書き連ねる。それは父親が愛人を作り、そこに金葉の腹違いの兄弟がいることと、東京留学に反対されていることへの不満であった。そして、在学中にそれらの不満を述べる金葉をなだめた「先生」の発言に対して反論するという体を取りながら、日本人批判もしている。

例えば、「先生」が台湾人の裕福な男性が複数の妻を持つという旧習について、「君が嫁に行く時代の本島社会に未だ第二夫人や第三夫人を置くやうなそんな悪い習慣があるわけではない」と言ったことに対し、金葉は「私の父の場合は(略)ちやうど内地人の方で、何処かへ妾宅を設けて世間にかくしたかこひ物を養つてゐるといふ状態と少しも変わらないのです」といい、妻を複数持ち、その家族を同じ家庭内に同居させていることの前近代性を指摘する「先生」の意見に反論しながら、日本人男性のモラルも台湾人を批判できるような物ではないと指摘しているのである。

さらに、金葉は内地修学旅行へ行った際の経験も指摘する。東京駅に到着した女学校生徒らを出迎えに来ていたOGたちは、彼女たちの目の前で台湾語で会話をしていた。また、OGたちは生徒達に対し「東京は自由でのびのびしてゐて、他人の生活などにうるさく干渉などしないよ」と述べ、「何だか私達お上りさん組をあはれむと言つた顔付」をし、また「パーマメントをかけて見違へるやうに美し」くなっていた。この何れも、台湾の学校における〈皇民化運動〉の方針と食い違うものであった。

学校の中で教えられた皇民化の理念を全く守っていない東京の様子を見た金葉は、「私達は今まで絶対に国語で話し合ふやうに学校でしつけられ、服装にしても台湾服を着用しないやうに、出来れば和服を着るやうにと言はれてゐましたのに、東京に来てみますと、この現状です。」とOGたちを批判する。しかし、この時の金葉の本当の批判対象はOGたちではなく、台湾の学校で指導されている〈皇民化運動〉が、現実には全く機能していないし、そもそも必要性が認められていないという点にある。つまり学校批判、教員批判であって、総督府統治の批判でもあった。金葉は事実、この台湾の教育の欺瞞に気づいており、修学旅行からの帰りの船中で実際に教員を激しく批判する。

然しその東京駅頭での第一の驚きをはじめとして、もつともつと数多くのことを見ました私は、台湾にゐた私達の生活について今までにないことを感じたのでした。さうしてその事は一つの疑問となり、それが何かしら心の奥底のつかえとなつて、どうにもならなくなつて、しまひにはこの旅行が不愉快になり自分ながら驚くばかりヒステリックに癩癩を起すやうになつて、帰りの船中ではまるで不逞な自分の心に苦しむやうになりました。それがとうとう先生の前で破裂してしまひました。(略)かうしたことが私にわけのわからない怒となつて胸に鬱々としたものになつて行つたのでした。ですからお船の中ではこれらのことを全くここでくりかへされぬやうな歪んだ言葉で先生に申し上げたあの自棄的な私に対して、先生は涙を浮かべて熱心に私の不心得をお悟し下さいました。先生は私一人の危機を救はうとし

たのではなく、私を通して何人かの立派な皇民を生み出さうと戦はれたのでしたね。

金葉が具体的にどのような「歪んだ言葉」を発したかは書かれていないが、文脈を考えれば、彼女が〈皇民化運動〉の無意味さと、それを強制的に教え込む日本人教員の欺瞞を指摘したのだらうと推測するのは十分な蓋然性があるだろう。金葉は自分自身について、台湾人向けの公学校ではなく小学校に入学した自分は「うまく台湾語は話せない」といい、「国語常用の家庭で内地人にも優る程の文化的な生活をして」いるとも語るほど、自身の〈日本人〉への近接性を主張している。それが自己の優秀性を披瀝することにつながると思っているからであり、それだけ深く〈皇民化運動〉にコミットしている一させられているのである。しかし、同時に学校教育によって教養と判断能力も養成された金葉は、自らの受けている教育の現実に対する齟齬と矛盾に気づかざるを得なかった。そのとき、彼女は深刻なアイデンティティ・クライシスに陥ることになる。教員に対する「歪んだ言葉」は、その発露なのである。

金葉はこの「歪んだ言葉」を発したことを詫びることを目的の一つとして「先生」に手紙を書いている。このテキストはその「手紙」であり、この「詫び」によって、〈皇民化運動〉批判をした愚かな台湾人生徒を、日本人教員が優しく論し導いた、という外面が整えられるのだが、「先生」の反論の具体的な内容は示されず、帝国の中心である東京において〈皇民化運動〉の規範が全く守られていないし、それが問題にもなっていないという現実を覆すものになっていないのである。

ただ、金葉は「先生」の話した内容が自身が批判する父親の意見と同じであるとも書いている。それは次のようなものであった。

東京を自由だと喜ぶ精神が果たして台湾を救ひ、台湾を向上させる積極的な力となるものか。台湾を引き上げようとするなら台湾の中に生きて台湾と共に成長すべきだ。

「先生」の発言内容が概ねこれと同様であるとした場合、今度は台湾人を心身ともに〈日本〉に収斂させるための〈皇民化運動〉の主旨を、〈台湾〉へ向けさせているところに別の問題が生じるであろう。まして台湾人であり、台南市議会議員でもある金葉の父親がこのような発言をしたことが公になれば、それは場合によっては抗日的とも取られかねない。つまり、〈皇民化運動〉の欺瞞を覆い隠すための言説が、別の問題を引き出してしまっていることになる。この発言からは、〈皇民化運動〉が矛盾した規範の寄せ集めだということが浮き上がってくるのだ¹¹。

11 林慧君は「新垣宏一小説中の台湾人形象」（『台湾文学学報』16号、2010.6）において、新垣の諸テキストにおける様々な台湾人の描かれ方を丁寧に分析している。その中に「城門」の金葉についての分析も含まれており、それは概ね本稿における理解と共通しているが、金葉が見聞きしたことについて「先生」を批判している箇所については、「先生」が金葉をなだめ、その忍耐と指導的態度に感激した金葉が、皇民化運動への

このテキストのタイトルが「城門」とされているのは、この金葉の父親が〈皇民化運動〉を熱心に進める中、台南に残る清朝時代の城門を破壊し、そこに公衆便所を設置すればいい、と市議会で主張したことに由来している。金葉の書き方から、教員は新垣同様に台南に史跡に強い関心があり、この父親の主張を馬鹿馬鹿しいものと捉えている様子が窺えるが、女子生徒はその点も、〈皇民化運動〉を唱え、台湾的因襲や文化を否定するよう推し進めているならば、父親の主張をばかげたものと切り捨てるのはおかしいのではないかと訴えている。

このように、「城門」は金葉を通じて台湾の大家族制度の問題点や、その中で苦しむ女性の姿を伝えるものにもなっており、同時に〈皇民化運動〉に深くコミットしている台湾人女子生徒を描くことで、逆説的に〈皇民化運動〉とそれを建前に進める日本人教員の不誠実を暴露することにもつながっている。そのような点から見れば、このテキストは台湾人社会に対する日本人側の傲慢な視線や、〈皇民化運動〉に対する批判意識の現れ、とも取れるであろう。

しかし、「城門」が手紙という体裁を取っていることに注意が必要である。この体裁を取ることで、テキストは金葉の一方的な意見表明が続くのみで、「先生」がこの訴えにどのように対応したのか、「先生」の〈皇民化運動〉に対する認識は実際はどのようなものなのか、その点に言及されることはない。つまり台湾人女子生徒の真剣な訴えをテキストという形でさらしながら、日本人側はそれへの回答から逃げているのである。

興味本位、趣味の一環として台湾人社会の文化や風習を得々と語りながら、その姿勢や評価方法について台湾人側から疑問を示されると、それには答えない、という形式は、台湾人生徒に〈皇民化運動〉を通じて台湾文化の否定・批判を強要する一方で、それに対する説明責任からの逃避である。

台湾人女子生徒の心情を露わにし、〈皇民化運動〉への疑義を感じ取らせていることをもって、このテキストの表現を評価することはもちろん可能であろう。そして、その心情や疑義が最終的に〈皇民化運動〉へ強引に回収される展開となっているのは、当時の表現の限界であると擁護する余地もあるかもしれない。しかし、そのような点を評価することはできても、それを取り上げたまま放置し、責任ある応答を示さない状況には、やはり日本人の傲慢さが反映されているのであり、それがおそらく無意識に行われ、またこの「先生」が個人として善良で穏やかな性格の持ち主であることが読み取れる時、よりいっそう〈皇民化運動〉の非人道性と無意味さ、そして植民地における支配者としての日本人の暴力性が浮き彫りになる。個人的な善良さ・穏やかさが、問題の隠蔽にしか役に立たないほど〈皇民化運動〉も植民地支配も抑圧的であり、それだけの強権を持つにもかかわらず、その意義について論理的な説得力を示せないほど、内容も合理性もない規範であることがわかるからである。

そして、そのような問題性を覚悟なく取り上げ、ただ放置するだけで、〈皇民化運

意識を深めていく、と判断しており、本稿とは解釈が異なっている。

動)のもつ欺瞞を背負うことから逃避するこのテキストは、その点においては批判されなければならないのである。

6. 「城門」後のテキストと中央文壇への意識

このようなく皇民化運動)の取り上げ方は、「砂塵」においても描かれている。

「砂塵」はやはり台南二高女と思われる学校を舞台にし、主人公も同様に日本人男性教員である。

テキストは、この日本人教員・野沢が、自分の担任クラスの学生・宝玉が父親の借金の形として身売りさせられそうになっていると相談を受けたことに始まる。野沢はもともとクラス内で自分の話(台南に関する知識の披露を中心としたもの)に興味を示さない宝玉を「陰気な生徒」と嫌っており、また貧しい宝玉が女学校に入学したことを「公学校卒業の時の出来がよくて、筋書通り受持の先生が惜しがって女学校へ入れるやうに親を説得した」ことが原因であるとし、遠回しに無理に富裕層が集まる女学校へ入学してきたことを非難するような態度を取っていた。それが、身売りの話を聞かされると、台湾にかつてあった習慣が今でも残っているのか、と俄然興味を覚え、宝玉を身売りから救済しようと活動を始めることになる。最終的には、台湾の公学校・小学校が国民学校に再編されるのを機に教員需要が高まるため、その教員に宝玉を推薦し、身売りについては口約束で証文もないため、警察署に届け出ることで解決しようとする。

それがうまくいくかどうかは示されないままテキストは終わるのだが、このテキストの中で、野沢は宝玉に対し「こんな子供にとって、女学校教育がどれだけ効果を持つものであろうか」「公学校の受持教師の一時の感傷の心さへなければかうした道に足を踏まずにすんだかも知れない」「彼女がこんな場合に直面した時に如何なる日本精神をもつて望むべきかといふ事は教へられてゐない。これは教育の責任とも思われぬ」と、自身の責任逃れを何度も考える。同時に教育の力の弱さについての反省も見せるが、最後はそれらを皇民錬成という、野沢がほとんど信じているとも思われぬ建前によってねじ伏せていくのである。

これは、台湾人児童・生徒に現場で対応している教員が、く皇民化運動)の徹底などほとんど信じていないこと、そして在台日本人には適用されないく皇民化運動)について、仕事として以上に実質的な興味も関心も持っていないことを示してもいる。そして、新垣のテキストは、そういった日本人教員の心理を、無邪気とも言える形で表現しているのであり、そのことの無責任さに意識が届いてもないのである。

「城門」と同じく、「砂塵」からは、日本人教員の「善良さ」は伝わってくる。それは作者である新垣の性質の反映であろう。しかし、新垣の描く日本人教員の「善良さ」は、あくまでく日本人)としての物であり、またく台湾人)のおかれた状況に対する関心の低さに起因するものでもあった。関心が低いので、強い差別意識もなく、台湾に暮らしながら

彼ら台湾人の生活や文化を自分たちと切り離して見ていたからこそ、興味本位のレベルでその文化を楽しんだりすることができたのである。そういった意味で、新垣とそのテキストは〈日本人〉であり、〈日本人〉のテキストであったと言えよう。

新垣は教員をしながら文学活動をしており、またその活動は台湾島内に限られていた。西川満が時に内地の文芸誌に寄稿したり、『文芸台湾』において日本内地の作家たちとの交流をアピールしたりしていたことや、濱田隼雄が連載小説「南方移民村」を『文芸台湾』誌上で完結させず、後半部を書き下ろしという形にして内地の出版社から単行本として出版したことなどから、『文芸台湾』は内地の中央文壇志向が強い雑誌であると、対抗誌『台湾文学』同人から批判を受けていたが¹²、新垣の立場はその点曖昧であった。

新垣が中央文壇に対してどのような思いを抱いていたかを明確に示すテキストは見つかっていない。しかし、新垣の意向は別として、彼とそのテキストの名が中央文壇の雑誌に登場したことがあった。『文芸』の1943年8月号の「文芸推薦」の中止について」という巻末記事においてである。

2014年現在、『文芸』は河出書房新社発行の雑誌となっているが、『文芸』は1934年に改造社が創刊した雑誌である¹³。そして、改造社は、この『文芸』や同社の代表雑誌『改造』において、本格的な公募型新人文学賞を行っていた。文学賞が懸賞金目当てと軽蔑され、〈文学懸賞〉と呼ばれていた昭和戦前期において、その意義を飛躍的に高めたのが1928年に始まった『改造』懸賞創作であり、それに引き続いて行われた『文芸』懸賞創作であった。

昭和戦前期の日本において、中央文壇で〈作家〉デビューする方法は、著名作家の弟子となったり、出版社に近い同人誌サークルや大学の文芸サークルに所属してコンテクションを構築していくといった、ごく限られたものしかなく、資格・条件を問わずテキストを公募する改造社の〈文学懸賞〉はそれに風穴を開けるものであった。第一回で一等に入選した竜胆寺雄がその後モダニズム文学の代表的作家としてめざましい活躍をし、第三回では元農商務省高級官僚の芹澤光治良と、小学校卒業後職を転々とし、アジア各地を放浪してきた大江賢次の、「エリート」と「叩き上げ」という対照的な経歴を持つ二人が、それぞれ海外を舞台としたテキストで一等、二等に入選した¹⁴。さらに翌31年の第四回では、インド独立運動を描いた田郷虎雄「印度」や、天理教内部の確執を描いた

12 濱田隼雄に対する同時代の批判の代表的なものとして、鹿子木龍「見損なつた濱田隼雄」『台湾公論』第7巻第7号(1941.7)がある。鹿子木は、『台湾文学』に移籍した中山侑の筆名であり、『台湾文学』派からの批判とも読むことができる。しかし、『台湾文学』同人の多くは1930年代に中央文壇デビューに挫折した経験を持つ人々でもあった。和泉司『日本統治期台湾と帝国の〈文壇〉』(ひつじ書房、2012.2)所収の「日本統治期台湾における〈日本語文学〉の始まり」を参照。また中山侑については中島利郎『日本統治期台湾文学叙説』(緑蔭書房、2004.4)所収の「中山侑という人」を参照した。

13 1944年、横浜事件の影響で改造社が解散したとき、『文芸』の発行権を当時の河出書房に譲渡したため、出版社が変わっている。

14 『改造』懸賞創作の第三回入選者である芹澤光治良と大江賢次の経歴の対照性とその比較が『改造』懸賞創作の存在意義のアピールとなったことについては、十重田裕一「芹澤光治良、その文壇登場——デビュー作「ブルジョア」の周辺」(『芹澤光治良展』世田谷文学館、1997.4)の指摘を参照した。

騎西一夫「天理教本部」が二等に入選した。この結果によって、『改造』はコネクションなどに拘わらず、テキスト本位で—ただし、『改造』が好む、海外事情や時事問題を扱ったテーマのものを入選させるであろうこと、入選すれば中央文壇で〈作家〉となることができるということ、多くの作家志望者に信じさせた。それは植民地でも同様であった。故に、30年代において、多くの台湾人青年達もまた、『改造』をはじめとする雑誌の〈文学懸賞〉入選を文学活動の目標に掲げるようになったのである¹⁵。その意味で、〈文学懸賞〉は〈台湾新文学運動〉に大きな影響を与えていた。1930年代に学生であった新垣は、『自伝』で〈文学懸賞〉に関する言及はしていないが、その存在は当然知っていたであろう¹⁶。

1935年に芥川賞・直木賞が始まると、改造社の公募企画は衰退を見せ始め、1939年を最後に『改造』懸賞創作は終わってしまったが(『文芸』懸賞創作は1936年で終了)、それを引き継いだのが、1940年から『文芸』が開始した「文芸推薦」という企画であった。「文芸推薦」は『改造』『文芸』の懸賞創作とは異なり、芥川賞・直木賞の仕組を踏襲したものであった。未発表テキストを公募するのではなく、同人誌などの既発表テキストから選り出されたものに賞を与える、という形式を取ったのである。このとき、芥川賞・直木賞と異なったのは、その候補作を、『文芸』側が探し、選り出すのではなく、日本中の文芸同人誌から、各誌一遍ずつ推薦作を送らせ、その中から選ぶという点であった。これが「文芸推薦」の名称の由来である。そして、植民地の文芸同人誌もまた、推薦作を送ることができたのであった。

「文芸推薦」では、第一回「文芸推薦」作品に選ばれた織田作之助「夫婦善哉」が何よりも有名であるが、この企画は第七回、1943年まで継続された。そしてその間、第三回(1940年下半年期対象)、第四回(1941年上半年期対象)、第七回(1942年下半年期対象)に、『文芸台湾』から推薦作が送られたことがわかっている。そしてそのいずれの回でも、『文芸台湾』からの推薦作は一定の評価を得ていた。第三回での推薦作は西川満「赤嵌記」、第四回は周金波「志願兵」、そして第七回が新垣宏一の「訂盟」である。新垣の名前とテキストが中央文壇の雑誌に掲載されたのは、このときであった。

西川の「赤嵌記」は最終候補まで進んだが、決め手に欠け第三回は該当作なし、周金波「志願兵」は選考委員の関心は引いたが最終候補にまでは至らなかった。

新垣の「訂盟」はどうだったか。既に述べたように、新垣の名と「訂盟」というタイトルが掲載されたのは、「『文芸推薦』の中止について」という記事においてである。1942年下半年期の第七回「文芸推薦」は途中で打ち切られ、最終結果が発表されなかった。新垣の「訂盟」は、この記事において、最終候補に残っていたテキストの一つとして掲載されたのである。

「訂盟」は、台南の女学校教員である「私」の元へ、台南出身の台湾人学生の兄弟林文金

¹⁵ 和泉前掲書を参照。

¹⁶ 西川満は、1934年の第一回『文芸』懸賞創作に応募し、応募作である「城隍爺祭」が選外佳作に入っている。

と文龍が相談に訪れることから始まる。林兄弟は台南の富裕家庭の息子で、文金は東京帝大法学部、文龍は台北高校の学生であった。二人は、台北高校の先輩でもある「私」の元教え子・碧華が今度文金と結婚することになったので、どんな生徒であったか話を聞きに来たのであった。

「訂盟」はこの文金の結婚話を軸に、台湾人学生の医学部進学志向の問題や、台湾の結婚制度、風習についての知識が織り交ぜられて進んでいく。やはり、台湾の知見を披露するタイプのテキストであった。内地から見て「特殊」な環境であるが、進学や結婚がテーマなので、台湾の予備知識がなくとも理解し、評価しやすいテキストであったと思われる。

故に、もし「文芸推薦」が中止になっていなかったらどうなっていたか、という推測も生まれる。特に当時の新垣はそうだったのではないだろうか。西川や周金波の時とは違い、新垣にははっきりした結果がもたらされなかった。それだけに、彼は自分自身と中央文壇との「距離」がつかみきれず、また自分の中の中央文壇への憧れをきちんと処理できなくなったのではないだろうか。

新垣のテキストには、先述の通り、小説の筋書きと並行する形で、新垣自身の台湾人社会における習慣・文化についての知識披露が繰り返されている。それらは内地へ向けたものというよりは、台北の在台日本人社会・在台日本人作家たちへのアピールであったと言えよう。台南での教員生活を通じて、台湾に対する知識を深めていったという自負が新垣にはあった。そして、おそらくは西川を念頭に置いた上で、在台日本人の多くは日本人社会の枠の中に閉じこもり、台湾のことを知ろうとしていない、という認識を持っていた。そのような状況において、新垣は自分こそが「本当の台湾を語る日本人作家」という自信を築いていたのであろう。それは、台南赴任当初は高く評価していた佐藤春夫の台湾関連テキストに対し、後に台湾の描き方が表面的であると批判的になっていったことにもつながっている¹⁷。

一方で、新垣は〈台湾新文学運動〉に参加経験がありながら、台湾人作家たちにはほとんど言及しなかった。おそらく新垣は、自分のことを「台湾を客観的に見ることができる人間」と措定しており、台湾人社会の内部にいる台湾人作家たちには、そのような見方が出来ないと考えていたのかも知れない。

ただ、「訂盟」の後に発表された「砂塵」においては、在台日本人に向けて、という以外の認識が読み取れる箇所がある。「砂塵」では、台湾の高等女学校では内地人・台湾人の事実上の分離状況があることについての解説や、台南市内で見られる典型的な台湾的風景の描写、台湾の国語＝日本語普及の状況、台湾の人身売買まがいの養子制度についての説明¹⁸、台湾でも義務教育が施行されること等が語られている。それらは、在台日

17 新垣は「台南地方文学座談会」（『文芸台湾』第5巻第5号、1943.3）において、佐藤春夫「女誠扇綺譚」について「長らく台南に住んで、これを何度か読みかへしてあるうちに、台南の文学はかうしたテーマを取扱ふだけでよいものかどうかと云ふことを痛切に感じ出して来たのです」と述べている。和泉前掲書所収「新垣宏一「砂塵」論」を参照。

本人向けの描写とは考えにくい。台湾在住者ならば、いずれも説明する必要がないことばかりだからである。つまり、これらは、台湾に住んでいない、内地在住の日本人読者を想定して書いていることになる。「訂盟」で「文芸推薦」の最終候補になったことを知った後の新垣の中に、台湾の外側への意識が生じていたのである。しかし、一方で、「公学校」「志願兵制度」「芸姐」といった台湾独自の用語を、特に説明もなく用いている箇所もある。この段階で、新垣の中で中央文壇への志向が生まれていたとしても、十分に具体化されていなかったのだろう。そして、1943年以降、アジア太平洋戦争の日本の戦局が悪化する中、台湾文壇においても中央文壇志向といった個人的な目標を目指す余地はなくなっていく。そのため、台湾の文学活動も、台湾の内側に向けたものとなっていった。〈皇民化運動〉から要請された〈皇民文学〉という枠組はその顕著な例であろう。「砂塵」は「城門」と比べ、台湾人の登場人物の心理を忖度できる部分に乏しい。「城門」は、問題を含みつつも、日本人男性教員に対して台湾人の女子学生が抗議する、という当時の台湾における民族的・性差的な規律に触れかねない状況を描いたが、「砂塵」ではそれはなくなり、善良な日本人教員・野沢の描写だけでテキストが進められている。危うい描写は少なくなり、表面的に〈皇民化運動〉をなぞっている「砂塵」は、当時としては穏当な内容となり、それだけに、野沢を通じて日本人男性教員の善良さが容易に独善性へと変化する様子が描かれることとなったのである。

7. 終わりに

新垣は前出の自伝、『華麗島歲月』の中で、自身と台湾との関係について、次のように述べている。

台湾で生まれ育った内地人、ことに私のような本島人[日本統治期台湾における台湾人の呼称—引用者]教育に生きた存在には、本島人側では内地人化するつもりであったのが、内地人少年が無意識のうちに台湾人化していったのではないかと、今日になって思うのです。私の作品『城門』『盛り場にて』『砂塵』などの台湾風景は、単に「皇民化」を主題にしているものではないと思います。成長した台湾二世の心情的台湾化の生んだものです。

支配者側の人間として生活していた台湾における自分自身を、「台湾人化」していた、と述べてしまうこの表現には、新垣が最晩年に至っても、個人としての善良さを持ち続けていたことと同時に、当時の(そしておそらくはそれから現在までも)台湾人が抱えていた困難とを自分に引きつけて考えることがなかったことが現れてはいないだろうか¹⁹。

18 これはいわゆる台湾の旧慣に属する話で、在台日本人、台湾人双方とも、文学テキストの中で陋習としてよく取り上げられた制度であった。

もちろん、〈在台2世〉である新垣が、自身を台湾と深い関係を持つ人間である、と考えるのは当然のことである。新垣は日本へ引き揚げた後、小説などの文学テキストを創作することがなかった。そのことを考えても、新垣が台湾における文学活動に対し、何らかの後ろめたさを抱いていたことを推察することは可能であろう。そしてそれは、彼の善良さと反省の結果であることは間違いない。ただ、そうであるとするなら、新垣は日本統治期にそれに気付くことがなかったのであろうか。それとも、気付いていながら、書いていたのであろうか。

戦後の西川満のように、台湾への「愛」を表明し続けることで、日本人の支配者性に一切触れずにテキストを描き続ける、という強引だが一貫した手段²⁰を、学歴エリートとして経歴を重ねてきた新垣はとることが出来なかった。おそらく、濱田隼雄が戦後台湾について沈黙することになったのも同じ理由からであろう。

今更と思われるかもしれないが、本論は新垣宏一とそのテキストを糾弾することを目的とはしていない。戦後の新垣が、本籍地の徳島県において教員としての生涯を全うしていることからわかるように、彼は教育者として堅実でかつ立派な人物であっただろう。もし新垣が植民地に生まれず、また帝国主義時代の日本に生まれたのでなければ、このような〈皇民化〉を扱ったテキストを描くことはなかったであろう。同時に、現在の「日本人」、例えば論者が新垣と同じ時に台湾で教員・作家として生きていた場合、新垣と同じことなどはしなかった、とは決して言えない。本論で指摘すべきことは、個人の善良さや教育の方針などが全く意味をなさなくなる、権力と一体化した帝国主義の強制の様子である。そうして新垣とそのテキストを見ると、その善良さ故に、それが一層際立つのである。

植民地在住の日本人が中心となった日本語雑誌のメンバーには、〈日本〉と〈台湾〉の狭間にあって、自分自身の位置づけに苦心する人々が数多くいたはずである。もちろん、それは支配者側の都合のよい意見であって、絶対的に過酷であったのは、日本語での文学活動を余儀なくされていた台湾人側であったことに違いはない。ただ、新垣とそのテキストの、〈台湾〉を描くことに対する無邪気さと無責任さの同居は、植民地出身日本人という存在もまた、看過できない問題を抱えていたことを象徴していると考えられるのである。

19 在日日本人作家であった濱田隼雄は、出身校は違うとはいえ（東北帝大出身）、新垣と同様の学歴エリートとして台湾で教員をしていたが、戦後に台湾から引き揚げた直後の生活の困窮を描いた小説「煙草」（『文芸丹頂』1948.8）の中で、教育官僚として支配者然と台湾で生活してきた自分を自嘲気味に描き出している。敗戦直後の一時期を除いて、濱田は台湾に関することは活字にしなかった。

20 和泉司「〈引揚〉後の植民地文学——一九四〇年代後半の西川満を中心に——」（『藝文研究』第94号、2008.6）において、戦後の西川満が繰り返し台湾を題材としつつ、植民地統治における日本人の支配者としての責任問題には一切触れなかったことを指摘している。

【付記】

本論作成に際し、十重田裕一氏が論考「芹沢光治良、その文壇登場——デビュー作「ブルジョア」の周辺」(『芹沢光治良展』世田谷文学館, 1997.4)において、第三回『改造』懸賞創作の当選者である芹沢光治良と大江賢次の略歴、および両者の当選の意味について論及されていることを知り、本論において参照させていただいた上、注14にその旨を記述しましたが、私は2008年以降に発表した下記の論文および著書において、十重田氏の論考の存在に気づかないまま、同様の記述をしていました。

「『改造』懸賞創作の行方—さまよえる〈懸賞作家〉と翻弄されるテキスト—」(『三田國文』第四十七号, 2008.6)

『日本統治期台湾と帝国の〈文壇〉—〈文学懸賞〉がつくる〈日本語文学〉』(ひつじ書房 2012年2月)

「生き残った〈懸賞作家〉・芹沢光治良—『改造』懸賞創作と〈懸賞作家〉への考察」(『日本文学』第62巻第11号, 2013.11)

「〈懸賞作家〉にとっての『改造』—『改造』懸賞創作第四回当選者・田郷虎雄を中心に」(庄司達也・中沢弥・山岸郁子編『改造社のメディア戦略』双文社出版, 2013.12)
ここにお詫びし、訂正いたします。

参考文献

- 和泉司(2012)『日本統治期台湾と帝国の(文壇)』, 東京: ひつじ書房.
河原功(1998)『台湾新文学運動の展開』, 東京: 研文出版.
河原功(2009)『翻弄された台湾文学』, 東京: 研文出版.
新垣宏一著・張良沢編訳(2002)『華麗島歲月』, 台湾: 前衛出版社.
西川満(1983)『わが越えし幾山河』, 東京: 人間の星社.
十重田裕一(1997)「芹沢光治良、その文壇登場——デビュー作「ブルジョア」の周辺」(『芹沢光治良展』, 東京: 世田谷文学館).
中島利郎(2004)「中山侑という人」(『日本統治期台湾文学叙説』, 東京: 緑蔭書房).
林慧君(2010)「新垣宏一小説中的台湾人形象」(『台湾文学学報』16号).
若林正文(2001)『台湾抗日運動史研究 増補版』, 東京: 研文出版.

和泉司 Tsukasa IZUMI

(日本)豊橋技術科学大学総合教育院。講師。日本統治期台湾の日本語文学、昭和初期から戦後までの文学懸賞・文学賞研究、台湾の日本語教育史など。『日本統治期台湾と帝国の(文壇)——〈文学懸賞〉がつくる〈日本語文学〉』(東京: ひつじ書房, 2012)、「邱永漢「濁水溪」から「香港」へ——直木賞が開いたものと閉ざしたもの」(『日本近代文学』第90集, 東京: 日本近代文学会, 2014)、「生き残った〈懸賞作家〉・芹沢光治良——『改造』懸賞創作と〈懸賞作家〉への考察」(『日本文学』第62巻第11号, 東京: 日本文学協会, 2013)。